

## 新聞／社の授業から得たもの

この十月から静岡文化芸術大学では、中日新聞・静岡新聞の両新聞社が共同で行う連携授業を開講している。

多くの新聞社が大学で授業を開講しているが、二つの新聞社が共同で一つの授業を担当するのは珍しい。授業名は「メディアとしての新聞／社」。新聞と社の中にスラッシュを入れたのは、ジャーナリズム以外にも、地域の文化事業を担ってきた歴史、デジタル化の取り組み、記者の方々のワークライフバランスなど、「新聞」だけでなく「新聞社」の多様な側面を、学生に理解してもらおうと考えたゆえである。

本来、本年度の四月に開講する予定だったが、コロナ禍の影響で十月からとなった。やや少なめの受講者数だが、学生たちの関心は高い。質疑応答でも多くの手が挙がり、質問時間が二十分でも足りないほどだ。

学生からの質問は、私が考えたこともないものもあり、本当に興味深い。例えば記者会見の際、記者たちが一心不乱にパソコンを打ち込んでいるが、肝心の質疑応答そのものに集中できているのか？といったものだ。確かに気になる点である。

こうしたやりとりから、私が特に注目したのは、学生たちが、新聞記事の「重み」といふべきものの理解を、授業を通して深めている点だ。

ここで「重み」とは記者の取材活動や裏付け調査、実名報道の際に警察や遺族、関係者の方々とのように交渉し、紙面に反映するか。そうしたやりとりの果てに、記事が書かれていることを指す。

「被害者や容疑者の人権を守るためにも事件報道の記事は注意を払う必要が特にある事が理解できた」とは学生からの直接のコメントである。

テレビをつければ、意味の通らない発言、その場をやり過ぎすだけの説明を多く見聞きする。発言や言葉が「軽い」時代でもある。だがこの授業を通して、同じ言葉でも、「軽い発言」と「重みのある記事」の違いが歴然と存在することを、学生たちが理解してくれたことは、一つの収穫である。

(静岡文化芸術大学教授)